

現場レポート

クラシック・コンサートにおける民間主催者の活動
——葉山室内楽鑑賞会の歩みと現状を中心に——

平井満

クラシック・コンサートにおける民間主催者の活動

—葉山室内楽鑑賞会の歩みと現状を中心に—

平井満 | 横浜楽友会

CLASSICAL MUSIC CONCERT: ACTIVITIES OF PRIVATE ORGANIZERS

—Focusing on the history and current situation of Hayama Chamber Music Concert Society—

HIRAI Mitsuru | Chamber Music Society of YOKOHAMA

キーワード：地方公演の衰退、民間主催者、地方自治体との提携、鑑賞会の再開
Keywords: Decrease of local concerts, private organizers, Collaboration with local governments, Restarting of the Concert Society

地方におけるコンサートの減少とその要因

2018年第11回冬の研究大会のシンポジウムにおいても、山形交響楽団の専務理事である西濱秀樹氏が地方における人口減少の現実について語られていたが、実際のところ、地方におけるクラシック音楽の演奏会の減少は、質量共に現実の人口減少をかなり上回るペースで進行している。クラシック・コンサートの砂漠化といえよう。その要因としては、いくつか考えられるが、主催者の減少、とりわけ地方公共団体や公共ホールの撤退があげられる。その分、行き場を失ったコンサートは、東京へと一極集中、こちらは土砂降り状態、実際の人口動向以上の勢いである。

1980年代、各地にはまだ多数の民間主催者が存在した。地方の新聞社やテレビ局、愛好団体、さらには楽器店やレコード店など、そして圧倒的な存在として各地の労音、音協、民音といった鑑賞団体である。ところが、国の方針や助成もあって各地に文化会館や市民会館が雨後の竹の子のように建設され、この時期、地方財政が比較的豊かであったこともあり、会館や公共団体は積極的にクラシック・コンサートを開催するようになった。しかし、ノウハウや経験を持たない人たちがやることなので、チケットはそう簡単にはさばけない。「売るためには安くすればいい」で「隣の町では5000円だが、当市では市の助成で2500円！」。それでもだめならただ券をばらまく（役所の論理では入場者数が重要なのだ）！ 何を取り上げるかについても知識を持たないので、近隣の公演を見渡して、入りのいいものに手を付ける。ほとんど言い値で買い取り、赤字分は税金をつぎ込む。そのため、近隣の民間

主催者がもう一度そのアーティストを取り上げようとしても、当然のことながら「前回の金額では……」ということになってしまう。これでは民間の主催者はたまったものではない。結果として、各地の民間主催者は次第に消滅していく。もちろん、労音などの衰退は他の要因も多々あると考えられるが、他の民間主催者、とりわけ小規模なものについては、間違いなく会館や公共団体主催のコンサートのあおりを受けたと考えられる。そしてバブルは崩壊、1990年代も後半となると、地方財政は急激に悪化する。こうなると悲しいかな、真っ先に切り捨てられるのが文化予算である。コンサートを開催するための予算などはばっさりと切り捨てられる。会館や公共団体の担当者にとっては、クラシック・コンサートは赤字が当然で、予算が付かなければ開催できないのである。こうして、各地のコンサートは消えゆき、砂漠化は全国的に広がっていくこととなる。

その一方で、着実に活動を続けている民間主催者や新たに活動を開始した民間主催者も存在する。一昨年の夏に刊行した拙書「クラシックコンサートをつくる。つづける。～地域主催者はかく語りき」では、そうした各地の民間主催者を取材し紹介したが、その企画段階（2014年頃）でまず取り上げようと思ったのが葉山室内楽鑑賞会であった。というのは、そうした各地の民間主催者の中でも、最も大きな実績を残しているのがこの会であると考えたからである。

葉山室内楽鑑賞会の歩みと現状

葉山室内楽鑑賞会の設立は1996年、その中心は地